

ゆたらかなる心

数人しかいない一家庭すら、なかなか仲よくゆかない。

仲よく治まらない家庭ほど、その中に、自分の相のわからない、そして人の欠点ばかりよく見える人がいる。そうした人は大きいところよりも、むしろ小さいこと、「私に對して返事をしなかった。」とか何とか、愚にもつかないことで、暗い顔をして家中を冷たくしてしまう。心のゆたらかにない人である。

一家の中心になつてゐる人は、必ず人よりも自分の身の上を省る。「問題は外にはなくて内にある。」猫に近い人ほど外ばかり眺めて善悪を言い、如来に近い人ほど内の世界がゆたらかである。内のゆたらかな人でなければ懺悔の心は持たない。

懺悔や、懺悔は、尊い徳目として仏は教えたもうた。

『涅槃經』に曰わく、

「善い哉善い哉、王罪を作ると雖も、心に重悔を生じて慚愧を懐けり。大王、諸仏世尊常に是の言を説きたまはく『二つの白法有り、能く衆生を救う。一には慚、二には愧なり。慚とは自ら罪を作らず、愧は他を教えて作さしめず、慚は内に自ら羞恥す、愧は発露して人に向う。漸は人に羞じ、愧は天に羞づ、是れを慚愧と名く。慚愧無き者は名けて人と為さず、名けて畜生と為す。』」

慚愧あるものは仏に近く、慚愧なきものは畜生に近い。

心のゆたらかなる者は切迫しない。心が切迫すれば、瞋恚や愚痴や自暴自棄の心に行きづまり、言葉が切迫すれば、人を傷つける。

カツと怒つて荒い言葉となり、荒い動作となる。心のゆたらかならぬ者の周囲はおちつかない。

およそ一芸一能に秀でた人は普通の人よりも豊かである。人に尊ばれ、後の世長く慕われるのもそのためである。お茶や、花のたしなみや、古の武士のたしなみ等、深いたしなみはゆたらかな心を造つた。俳聖芭蕉、茶聖利久等には、普通人の及ばぬものがあつた。

仏は、衆生を「貧苦」と言われた。衆生は貧しきものであり、それ故に苦しむ者である。衆生とはまことに貧しくして苦しむ者である。しかるに法蔵菩薩は、

「我無量劫において、大施主と為りて、普く諸の貧苦を濟はずば、誓ひて正覺を成ぜじ。」

とお誓い遊ばされた。

まことに如来は、無量劫において、貧苦なる一切衆生に限りなく廻向して下さる大施主である。如来の大善大功德を南無阿彌陀仏の名号のうちに成就して、それを貧しき衆生に廻向して、ゆたらかにして下さる大施主である。

如来は法蔵菩薩となりたもう。法蔵と貧苦。如来は尊き法の蔵であり、衆生は何ものも持たざる貧苦である。しかるに、無限の法蔵は、貧苦の衆生の信心の扉を通して開かれるのである。

「弥陀をたのめば南無阿彌陀仏の主になるなり、南無阿彌陀仏の主に成るといふは信心を獲ることなり。」(御一代聞書)

名体不二の名号は、如来の全体であると共に、念仏衆生の全体であつた。

一家七人心中、百円の欠損をかかえて盆が気になり、妻子六人を殺して、家に火をつけ、自らは縊死した男があつた。まことに同情せずにはいられない悲惨事であり、重大なる社会問題である。そんな貧しい人があることは、決して大御心ではない。

しかしこうした境遇にあれば誰でもそうするとは言えない。この人は、物において貧しい前に、心の貧しい人である。念仏に生ききつた我が同胞ならば、決してそうした結果にはならなかつたであろう。物に貧しかつたと共に、念仏金剛の信心の恵まれなかつたことを悲しく思う。

「合掌 南無阿弥陀仏

先生久しく御無沙汰いたして居ります。私の病中には、御親切に御見舞の御書面を頂きまして、有難く厚く御礼申し上げます。先生の深き御慈悲をただ泣いて拝受致しました。まことに御聖言の通りに、お念仏の中に静かに毎日を送らせて頂きます。御恵みによりまして、私は全快させて頂きました。しかし不幸にも又続いて家内が乳癌で大手術を受けて右の乳を切り落してもらい、今休んで居ります。私は宿業により、重ねがさねの不幸に会つて居ります。この苦しい業に会わなったら、先生にお会いする事も出来なだ事と思ひます。たとえ先生の御教をお受けしても、真実の御力を知る事が出来ず、我執を離れる事も出来なだ事と思ひます。私は今一切の不幸に対して感謝いたします。不幸の源泉に対する御恵みに対して合掌いたします。私は私の不幸を先生に申して御同情を受けるものではありません。この手紙を出させて頂くのもおそろしい気が致します。私は私の業を抱いて毎日を送るところに合掌する自由な世界が開けます。ただ私は念仏の中に静かに労働いたし、家計を立てるつもりで居ります。ただ是が私に与えられた一本道であります。

先生、秋の報恩講にも帰らせて頂けるかどうか、開けて来る御恵みの力より外、申さしてもらふ事も出来ません。不幸にして一二年は帰らせて頂くことが出来ないかも知れませんが、何とぞお察し下さいまして御見すて下さらぬようお願い申し上げます。たとえ帰らせて頂くことが出来なくても、私は先生のお慈悲をはなれることは出来ません。合掌して厚く御礼申し上げます。限りなきこの胸中の心持ちをお念仏にかえさせて頂いてお別れいたします……………」

以上は、我が丸山甚造様のお便りである。重ねがさねの御不幸の中に、合掌して重い宿業を背負いきつて、歩みきつていられるお姿がしのばれる。言々句々、我が肺腑をつく。念仏の境の厳肅にして尊い哉。力強く歩みたまえかし、順逆二境ただ念仏生活の資糧となる。

宿業が色々な形となつて現われ、身に迫つて来れば、まことに貧しくして苦しき「貧苦」そのものであることが知られて来る。

しかるに念仏の子は、合掌の中に久遠の宿業を負うて「私は私の業を抱いて毎日を送るところに合掌する自由な世界が開けます。」と、「与えられた一本道を」歩ませて頂く。

重い宿業を負うてゆくには強い力がある。それに行きづまらないだけのゆたらかさがある。如来はその一切を恵んで下さる。

久遠の真実たる如来の前に五体投地して合掌するのには、深い／＼内観が成就しなくては出来ることではない。

呪わしく周囲の者を恨む心に囚われていても、反感や対立やで突っ張っていても、言いわけやゴマ化しが残っていても、名利心のとりことなっている、決して真実に頭を地につけることは出来ない。

頭が地につかないでは、宿業を諦観して、一荷に背負い、光の中を生きさせて頂くことは出来ない。如来は一切を廻向して、下らぬ頭を下げ下さる。

ゆたらかに実った稲の穂が頭を下げている。

仏や菩薩は、みんな大地に合掌して頭を下げていられる。

凡夫と白枯れた稲の穂だけが頭を高くあげている。

凡夫はその上に、更に自分の正しさを主張する。肩を張りつゝ。

日本の国土は豊葦原のゆたかに恵まれた国である。

日本国土の内面には、ゆたらかな聖なる心が流れていて下さる。

世界の相を眺めつゝ、静かにこの感激を持たない者がいるだろうか。

「是の故に、信聞、及び、諸の善友の摂受を具足して、是の如きの深妙の法を聞くことを得て、常に諸の聖尊に重愛せらるることを獲べし。」(信卷、如来会の文)

如来の広大なる大法を、大善大功德を聞信の一念に廻向せられること、有難き極みであるのに、み法の世界において、更に尊き多くの善友を恵まれて、それに護られ、その上さらに「諸の聖尊に重愛せらるることを獲」とは、念仏の世界のゆたらかさであることよ。

今日一日生かされることの有り難い哉。